

徳とく泉く寺ほ報う

No.0036

発行

令和2年10月

発行元 徳泉寺

仙台市宮城野区

榴岡3-10-3

(022)297-4248

tokusenji.sendai

@gmail.com

「報告

二〇二〇年度 報恩講 勤修されました

令和二年十月二十四日(土) 徳泉寺におきまして、親鸞聖人のご命日法要である『報恩講』を無事に勤修いたしました。コロナ禍において、どのような形でお勤めさせていただければ良いのか、他のお寺の住職さんやご門徒さんなど多くの方の意見を聞きながら、お斎(お食事)の自粛、他寺院の法中(僧侶)さんたちのご出仕見合わせなど感染リスクの減少に配慮しながら手探りで開催となりました。

前日の会場準備では、食事の仕込みがない分、普段なかなか目も手の行き届かないところまでかえって丁寧に清掃していただくことができました。当日は気持ちの良い秋晴れ。手指の消毒をして、マスクをして、椅子と椅子の間にスペースを確保して。いつもと違うこともありましたが、親鸞聖人のご命日に手を合わせ、仏の教えが私にまで届いたことに感謝しながら、私の命について考える機会をいただく、そのことにおいては変わりがない、ということに改めて気づかされる報恩講でもありました。はじめましての方、お久しぶりの方もあって、こじんまりと、でもそこに温かい人と人との交流があつて、しみじみと心に染み渡る、そんな御講であつたように感じます。いつもは法中(僧侶)さんの声が高々と響く勤行の『正信偈』も、事前の同朋会で練習したこともあつて、講師先生が驚くほどご参詣のみなさんのお声が響き、集ってくださるみなさまあつての徳泉寺らしい報恩講となりました。



講師法話一部抜粋

小野和徳 師 (若林区 浄澤寺) (住職)

本日の報恩講は親鸞聖人七五九回目のご法事です。この「報恩講」みなさんどうしてご参詣されているのでしょうか。きっとみなさん、親鸞聖人の教えに触れたという思いに至るご縁をいただいて、このご本堂で一緒にお勤めをしたいと考え、足を運ぶようになったのだと思います。しかし、それがいつしか「行かなくちゃ」になってくるのが人間です。

この親鸞聖人、どういう人であつたのかというと今から八〇〇年前、法然上人に出会い「念仏を拠り所にして生きていく」ことを決めた方です。聖人の言葉に「雑行を捨て本願に帰す」という言葉がありますが阿弥陀の願いである「本願」を拠り所にしてそれ以外の「雑行」を捨てるのだそうです。私たちは自分の思い通りにいけば感謝し、思い通りにいかないと自分以外のところに原因を探します。そういうところに立っているのが「雑行」だと言うのです。念仏の教えを拠り所に生きていくと、出会ったことに対して受けとめ方が変わってくる、そうすると「空過」空しく過ぎるということがなくなってきます。この空過とは今を考えていない、ということ。人は時に「段取り」と「準備」に生きがちなのです。未来の心配をするばかりで今を生きていることができない、これが「空過」です。阿弥陀が私に願ってくださった「生きていく」と今を生きていきなさい」という本願に出会うと私が今を生きていない「空過」な状態であることに気づきます。このことを認識して解放してくれるのが教えに触れるということです。この報恩講を私の足元の大地に触れる大切な機会としましょう。